

症例 11 散歩中に、ゴミを集めて 持ち帰る

- ・ K氏 68才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 数年前から物忘れを中心とする症状が出現。最近の出来事を覚えていない。外出して同じものを買ってきてしまう。メモをするが置き忘れている。化粧の仕方が下手になった。入浴をしなくても平気である。

症状〔2〕群 1日中、頭痛・腹痛などを訴えて大騒ぎをする。1ヶ月前から「タバコください」と繰り返す。そして、突然毎日40本位吸うようになった。禁止しても催促し、異常な興奮状態となる。

生活歴

Kは非常にわがままな性格であった。夫は田舎の実直な元公務員。子供は女と男の2名。

長男が大学を卒業し、東京の一流会社に就職した。Kは夫を田舎に残して上京した。そして長男と暮らしていた。子離れができていない母親であった。やがて、長男が結婚したためにKは田舎に帰った。

田舎では身体、特に胃の不調を訴え、地元の病院へ入退院を繰り返す。「検査の結果は異常ない」と医師には言われるが、良くはならない。東京に出て来て、息子の家から病院へ通うようになった。経過は一応良好であったが、それ以上は良くならない。

【経過】

入院中、タバコ1日40本の喫煙が続いていた。長男が面会に来る日はタバコの要求が少ない。「長男に会いたい」が、「タバコください」に置き換わっているようであった。長男が面会に来ることになると、からだの不調の訴えも減った。

全般的にKの経過は良好であった。Kは退院を希望した。夫の居る田舎へではなく、長男の家への退院要求であった。長男が言うことを聞いてくれないと、Kの容態は一変し、タバコの要求と腹痛などの訴えの繰り返しが始まる。それでも、長男の面会があるので、Kは元気になった。

このような頃、Kは長男宅へ外泊することになった。Kは嬉々として出かけた。退院させてもらえたらいい。しかし、帰院した時のKは表情がこわばり、沈み込んでいた。

長男は「母とは一緒に暮らせません。残酷なようですが、母には、はっきりと『田舎の父の家へ帰って欲しい。自分たちの所へは来てもらいたくない』と言った」とのことであった。その後、長男は面会に来なくなった。

Kには「タバコください」という訴えがなくなった。

Kは散歩の時、道に落ちているごみを拾って持ち帰るようになった。

更に行動は変わり、外出をしなくなった。自分の部屋に居て、畳に落ちている小さな塵にこだわり、一日中拾い集めるようになった。我々の呼びかけも聞こえないようであった。

【メモ-1】

息子へのこだわりが、塵へのこだわりとなった。

拾って手に握りしめているゴミや塵は、Kが願っている『長男と一緒に生活していること』を意味していた。

これらの症状の出現は、認知症が進行したことを示していた。

【メモ-2】

子供と一緒に生活したいと願っていたが、その願いが崩れた『自己実現喪失タイプ』の症状を示している認知症である。

この場合、願いが強ければ強いほど、あるいは子離れができていないほど、悲しみが深く、早い時期に認知症が進行する。遺伝子や染色体を問題として発病するアルツハイマー病と間違い易い認知症状態の進行である。

【メモ-3】

「息子と一緒に生活したい」や「嫁がおかねを盗った」などの訴えを無視すると、やがて認知症の母親は訴えることをしなくなる。

しかし、症状が変わる。

- ① ティッシュペーパーやゴミなどを集めることにこだわるようになる。
- ② 「今、何時？今、何時？」
- ③ 「ご飯まだ？ご飯まだ？」

などの訴えの繰り返しにもなる。つまり、対象(息子)を変えた『こだわり』の行為となる。『独りごと』を言っているなどの症状も同様である。

ティッシュペーパーや、集めているゴミは息子であり、「今、何時？」「ご飯まだ？」は、「息子に来てもらってよ」「息子はまだ来ないの？」などの言葉と同じである。

【まとめ】

高齢になった母親は、長男に悲しい思いをさせられると認知症になりやすい。認知症は進行しやすい。